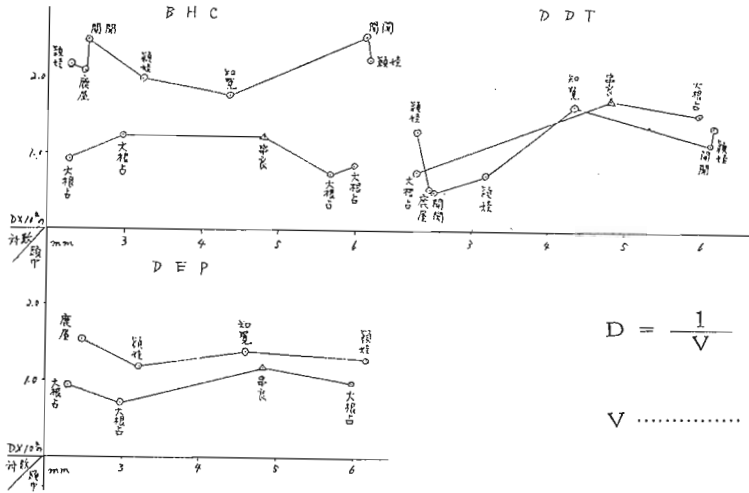


L D 50 (24 時間)



$$D = \frac{1}{V}$$

V 稀釈倍数

きにくい傾向にあり、その差は約19%である。

(2) 室内試験

回帰方程式により24時間のLD50を求めた結果、BHCは両地域間に $D \times 10^4$ の対数で約1.0の差が認められ、BHCが効かないことが確認された。DDTは交さくし、差は認められないが、D

EPは屋外試験同様、両地域間に若干の差があるものと推定される。また、BHC防除歴が或る程度ある単良は防除歴の少ない大根占と大きな差はないが、一方鹿屋ではBHCが効かない類娃、開聞地域と同じ様な傾向を示している。この事は農業防除の影響が大きいものと推察される。

130. 林野における野鳥類の群集構成について

鹿児島県林業試験場 勝 善 鋼
鹿児島県林政課 豊 饒 芳 明

林野における野鳥類の時期的な群集構成の変化について調査を実施し、概略を把握したのでその結果を報告する。

I. 調査地

第1調査地：鹿児島県始良郡蒲生町新留

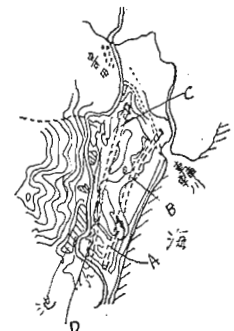
本県の内陸部に位し、調査線はノブドウ、サルトリイバラ、ススキ等の繁茂せる区域、広葉樹、マツの混交せる区域等となり、林地況複雑で、定線長は4kmである。

第1図 調査地位置



第II調査地：鹿児島県川内市寄田町

海岸に面し、面積数100haにおよび広大な砂丘からなる。飛砂防止用、防風用として、マツ(10~50年生)が植栽されている。この林内に第2図に示した如く、定線をA、B、C、Dの4つに区分して、A、B、C、Dの順で調査を行なった。調査区の概況については第1表に示した。



II. 調査方法

第1表 調査区の概況

調査区	定線長 m	海岸からのキヨリ m	林 況	概 況
A	400	200 } 300	マツ(10~20年生) ハマヒサカキ、ネズミモチ、アカ メガシワ、ツバキ、アラカシ	松枯損ひどく、かなり大きなツバキ がある。 地形や、複雑
B	1,600	500 } 600	マツ(15年生)95% " (50年生)5%	マ ツ 純 林
C	1,700	500 } 600	マツ 15年生 90% " 50 " 5% ヤマモモ、ナワシログミ	桑園が2.3カ所あり ヤマモモが点生
D	300	400 } 500	マツ、ハマヒサカキ、アカメガシ ワ、アラカシ、ナワシログミ、フジ カズラ	調査区の中で最も林地況複雑

定線法によった。上記の2調査地に調査線を設定し、定線の左右20mずつ(40m巾)の内で見聞した鳥の種類、数を記録した。調査は原則として月の中旬に1回(1、5月は2回)早朝から実施した。調査時間は3~4時間であった。結果のとりまとめはツバメ、

スズメ等は除外し、観測数のままを用いて統計解析を行なった。

Ⅲ. 調査結果及び考察

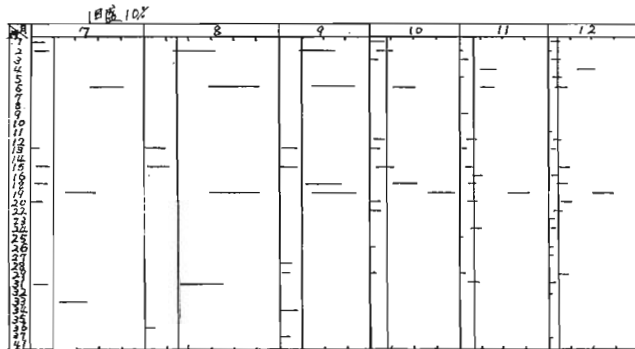
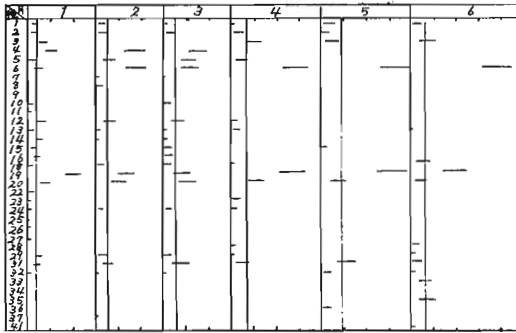
1 第1調査地

i) 種類

第2表 調査線上に現われた鳥の種類

№	種 名	I 調査地	II 調査地	№	種 名	I 調査地	II 調査地
	カ ラ ス 科				ツ グ ミ 科		
1	ハシボソカラス	0	0	22	ツ グ ミ	0	0
2	ヒュウガカケス	0	0	23	ア カ ハ ラ	0	0
	ア ト リ 科			24	シ ロ ハ ラ	0	0
3	コカワラヒワ	0	0	25	ノ ビ タ キ	0	0
4	ミヤマホホジロ	0	0	26	ジ ヨ ウ ビ タ キ	0	0
5	ア オ ジ	0	0	27	ル リ ビ タ キ	0	0
6	ホ ホ ジ ロ	0	0		キ ツ ツ キ 科		
7	イ ガ ル	0	0	28	キュウシュウコゲラ	0	0
8	カ シ ラ ダ カ	0	0		ハ ト 科		
9	ノ ジ コ	0	0	29	キ ジ バ ト	0	0
	セ キ レ イ 科			30	ア オ バ ト		0
10	ビ ン ズ イ	0	0		キ ジ 科		
11	ハ ク セ キ レ イ	0	0	31	コ ジ ユ ケ イ	0	0
	メ ジ ロ 科			32	キ ジ	0	0
12	メ ジ ロ	0	0		ホ ト ト ギ ス 科		
	シジュウカラ科			33	ホ ト ト ギ ス	0	0
13	カゴシマシジュウカラ	0	0		ヒ タ キ 科		
14	ヒ ガ ラ	0	0	34	エ ゾ ビ タ キ	0	0
15	キュウシュウエナガ	0	0	35	コ サ メ ビ タ キ	0	0
16	キクイタダキ	0	0	36	サンコウチョウ	0	0
17	コ ガ ラ		0		ワ シ タ カ 科		
	モ ズ 科			37	ト ビ	0	0
18	モ ズ	0	0	38	ノ ス リ		0
	ヒヨドリ科			39	ハ イ タ カ		0
19	ヒ ヨ ド リ	0	0		コジュウカラ科		
	ウグイス科			40	キュウシュウコジュウカラ		0
20	ウ グ イ ス	0	0		カワセミ科		
21	セ ツ カ	0	0	41	ヤマシヨウビン	0	

第3図 第I調査地鳥の種類と月別個体数
関係(百分率90%信頼率)



第2表のとおりであった。筆者の一人豊饒は41年6月23日の観察で、我国で迷鳥として記録されているヤマショウビン1羽を確認した。定線外ではコガモ、キセキレイ、アオバト、アカショウビン等を確認した。

ii) 月別集群構成

第3図に調査線上で観察した鳥の個体数の百分率を90%の信頼度のフレとともに示した。各月の

第4表 各月の優占種

月	種番号
1	3.4.12.14.19.20
2	4.6.19.20
3	4.5.6.20
4	6.19.20
5	6. 19
6	6. 19
7	6.19.33
8	6.19.31
9	6.18.19
10	6.18.19
11	4. 6.19
12	4.19.20

優占種は第4表のとおりであった。種類数は1月が最も多く25種、8月が7種で最も少なかった。第4図は月間の変動をみるために相関法により図示したものである。この図から4~8、9~10、11~3がやや近似した個体数の種類間相対密度をなしてい

る。

2 第II調査地

i) 種類

第2表のとおりである。定線外ではノジコ、カイツブリ、ハシブトカラス等を観察した。調査区別の種類と数は第5表のとおりである。

ii) 月別群集構成

第5図に月別の構成を図示した。各月の優占種は第6表のとおりであった。月間の変動は第I調査地とは同じであった。

3 両調査地の対比

調査地別の絶対密度の対比を第6図及び第7表に示した。定線の内外での観察、線上での観察回数を考慮に入れると2、4、5、18、20、33は第Iに多く、3、10、28、37等は第II調査地に多く生息している種ではなかろうかと考えられる。

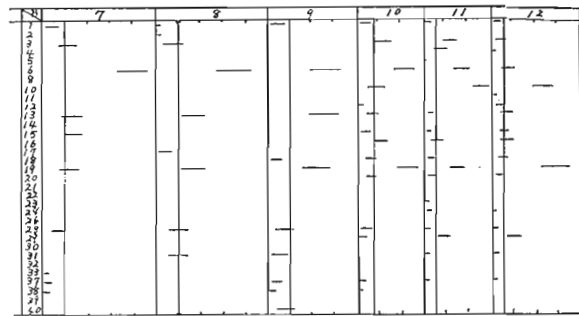
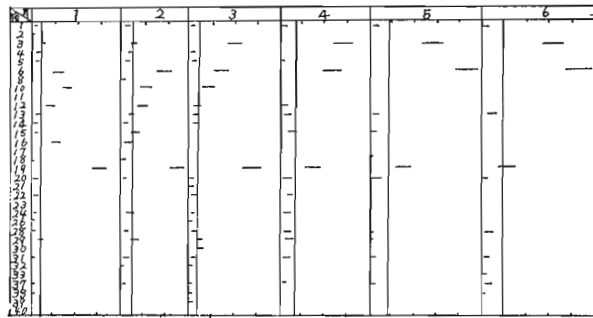
第5表 調査区別鳥種の個体数

種	区				計
	A	B	C	D	
1	18	16	33	6	73
2	1	0	0	1	2
3	39	139	232	33	443
4	6	17	39	8	70
5	25	4	5	3	37
6	202	204	287	30	723
8	0	0	1	0	1
10	33	116	189	0	338
11	0	1	0	0	1
12	24	10	38	42	114
13	36	48	62	19	165
14	2	5	4	2	13
15	4	17	41	29	91
16	3	62	71	8	144
17	4	0	0	0	4
18	18	9	9	2	38
19	290	72	212	159	733
20	72	6	22	25	65
21	0	0	3	0	3
22	13	0	22	2	37
23	0	0	3	0	3
24	18	5	7	6	36
26	0	0	2	1	3
28	18	12	20	17	67
29	30	10	17	20	137
30	7	0	0	9	16
31	17	6	13	15	51
32	0	1	1	0	2
33	0	2	0	0	2
37	15	5	2	3	25
38	3	2	2	1	8
39	2	0	0	0	2
40	0	0	0	8	8

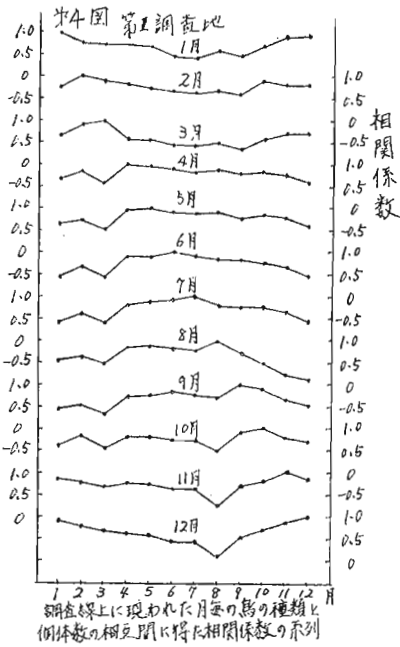
第6表 各月の優占種

月	種 番 号
1	6.10.12.16.19
2	6.10.12.19
3	3.6.10.19
4	3.6.19
5	3.6.19
6	3. 6
7	6.13.19
8	6
9	6.13.19
10	3.6.19
11	3.6.10.19.29
12	10.19.29

第5図 第Ⅱ調査地鳥の種類と月別個体数関係
(百分率90%信頼率) 1目盛10%



第 6 図



第7表 調査地別の密度の有意に高い種

調査地	種 類 番 号
第Ⅰ調査地	2.4.5.20.31.18.5.14.33.35.26
第Ⅱ調査地	1.3.6.10.19.13.29.16.28.30.40.38.37

